衛生都市ベルリン
― 鷗外のもう一つの都市体験 ―

Die hygienische Stadt Berlin
—Eine andere Berlin-Erfahrung von MORI Ogai

美留町　義　雄
Yoshio BIRUMACHI

中庭の光景

十九世紀末のベルリンに生を受けたヴァルター・ベンヤミンは、『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』において、過ぎ去った幼き日々を振り返っている。[1]その際、とりわけ彼のイメージに立ち現れたのは、彼が住んでいた集合住宅の中庭の光景であった。高層のマンションに取り囲まれたその空間は、幼いベンヤミンを優しく包み込み、それはまるで発展と拡大を続ける首都の喧噪から、彼を庇護するかのようにも思えた。その場所でベンヤミンが夢想するのは、狭い空間に葉を茂らせた木々のざわめき、壁から壁へ張り渡された洗濯紐、巻き上げられるブラインド、中庭に面した薄暗い回廊とそこに置かれた骨董品などである。これらの断片的な連想はすべて古色を帯び、それはまた、「世界都市ベルリン」へと突き進む時流に背を向け、暗がりでひっそりとよどむこの小世界のありようを示すものであった。

しかし、中庭というトポスに寄せるベンヤミンの想念には、古びた過去に対するノスタルジー以上の何かが感じられる。例えば、微細な事象にまで及ぶ彼の視線は、中庭に植えられた木々の根本の部分、「そこだけは舗石が敷かれて」いないむき出しの地面に向けられる。鉄輪で区切られたその「黒い穴」は、舗石が敷きつめられた人工の路面にぽっかり口を開けた深淵でもあるだろう。また同時に彼は、中庭の外部に響く、市街電車の音を聞き逃さない。彼が住んでいたのは、市中公園（ティーア・ガルテン）の南に造成された、西区と呼ばれる新興の住宅街である。そんな彼の周囲にも、すでに路面電車が縦横に走り回っていた。ベルリンでは十九世紀末以降、このように道路や交通の整備が進み、都市の隅々にまで

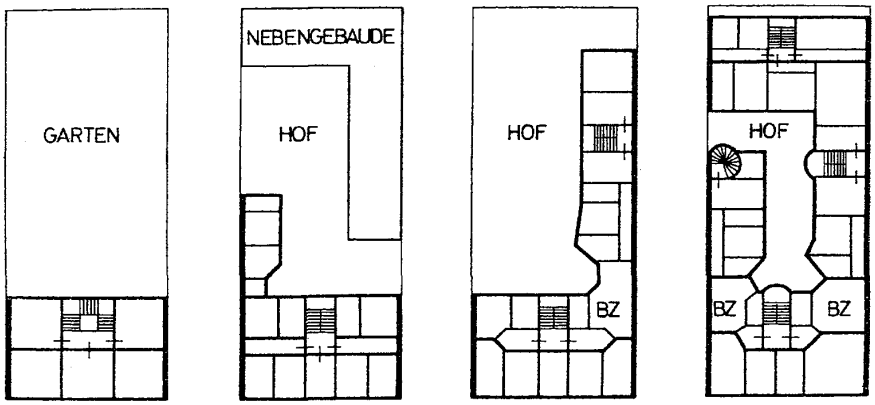
舗装が行き届き、鉄道馬車から代わった市街電車が、街中に路線網を拡げていた。ベンヤミンの回想は、幼少の彼が安らっていた中庭という世界が、実は常にこれらのネットワークに取り巻かれていたことを告げている。そこを見下ろすベンヤミンの眼差しは、単に過去へ向けられているだけではない。それは、いまだ都市機能の網目に取り込まれない中庭の静謐を、言いかえれば、どこにも接続されずに自律するこの領域の「アウラ」を、確かに感じ取っていたのである。

ベンヤミンが生まれたのが一八九二年、そして森鷗外がベルリンに留学していたのが一八八八年までである。微妙な差のすれ違いであるが、過去へ向けられたベンヤミンの視線と鷗外のベルリンはどこかで重なり合うかもしれない。当時の鷗外の都市体験を伝える重要なテクストでもある「舞姫」を見てみよう。この小説においても、ごくわずかではあるが、中庭の光景を垣間見ることができる。主人公の太田豊太郎は、鷗外も一時住んでいた古伯林（アルト・ベルリン）と呼ばれる旧市街において、舞姫エリスと邂逅する。その後、エリスは豊太郎を家へと導くが、その住宅の様子は、次のように描写されている。

人の見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上ぼりて、四階目に腰を折りて潜るべき程の戸あり。(2)

図版1　ベルリンのカゼルネの一室。

すでに指摘されているように、エリスが住まうこの建物は、爆発的な人口の増加に悩む十九世紀末のベルリンで急造された、ミーツカゼルネ（Mietskaserne）と呼ばれる粗悪な賃貸アパートである。(3) 通りに面した「大戸」、すなわち共同玄関を入るとすぐに「梯」があり、各階の住居へ通じる構造になっている。エリスの住まいが「四階」の屋根裏部屋（マンサルド）にあたっていることからも分かるように、ミーツカゼルネは四〜五階建てが普通であった。そのうち一階は店舗や事務所が占めており、二階が、「ベル・エタージュ」と呼ばれる、その建物の中で最も格の高いスペースとなっていた。それから上階へ行くにしたがい、家賃は下がって部屋は狭くなり、大勢の小職人や労働者達が、限られた空間に押し込められるように住む階層をなしていた。「腰を折りて潜るべき」小さい入口は、そうした劣悪な住宅事情の一端を伝えている。住まいの階数は、当時の社会階級を克明に反映していた。とすると、スラムに等しい旧市街の屋根裏に住むエリス一家は、文字通り社会の最底辺に位置していたことになる。



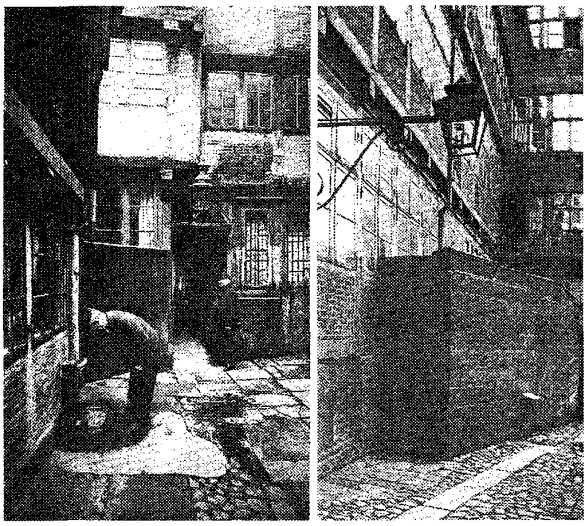
図版２　中庭が形成されるプロセス。十八世紀の一家族用邸宅が、十九世紀末にかけて高層アパート化して行く。

このミーツカゼルネは、通りに面していた家屋に、次々と側翼を増設して、空間を取り巻くように建てられていた。図版２を参照していただきたい。左から順に眺めると、初めは一戸の建物と庭（GARTEN）があったが、そこに次々と建て増しされて庭が取り囲まれ、やがて中庭（HOF）を形成するさまを見て取ることが出来る。この増築にともない、二～三階建てだった建物が、上方にも継ぎ足され、次第に高層化するのが常であった。もちろんエリスの住むアパートにも、このように取り囲まれた狭く薄暗い中庭があったろう。実際、鷗外は、「舞姫」の草稿の段階において、先の引用の箇所を次のように綴っていた。

人の見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戸を入れば、表家の後ろに煤にて黒みたる層楼にて取り囲まれたる中庭あり片隅には芥溜の箱あれど街の準には清らなり石の梯を登りてみれば潜らば頭や支えんと思ふ計りの戸あり[4]（傍点引用者）

「表家の（…）清らなり」の部分は、その後、推敲の過程で削除されてしまう。しかしこれは、ベルリンの貧民街における中庭の様子を―それは裕福なベンヤミン一家が住んでいた先の環境とはまた異なるものではあったが―端的に伝える一節として興味深い。通り沿いの「表家」、その裏側に「層楼にて取り囲まれたる中庭」があることはすでに述べたとおりである。さらにそこには鷗外の描写するとおり、住民達が使う「芥溜の箱」が設置されており、通常その他に、共同の井戸やトイレが置かれていた。四方を囲む建物は煤煙で黒くすすけ、日はろくに射し込まず、空気もほとんど通わない。そんな中に立ちこめるゴミや排泄物の臭気は、特に夏期には耐え難いものであり、当時頻繁に蔓延したコレラなどの疫病が発生する危険性を常に孕んでいた。

実際に鷗外は、衛生学的な見地から、中庭を形成する建築構造の問題性を指摘している。「衛生新篇」は、ドイツのマックス・ルプナーによる『衛生学教本』[5]を原本に、鷗外が大幅に手を加



図版３　中庭に設置された共同の水道とトイレ。

えて著した教科書である。その書で鷗外は、過密なミーツカゼルネ式の家屋の配列を「閉式」と表し、次のように記している。

閉式ハ地面ノ利用上ヨリ起リタルモノニシテ古都並商家街ハ多ク此式ヲ取ル即チ家々密接シテ線状に相列ナリ町幅狭ク屋棟高ク且多クハ暗キ坎様ノ中庭ヲ隔テゝ背屋（裏屋）ヲ連設シ更ニ窖室ト梁室トヲ以テ住居ニ充ツ其弊タル照光ニ乏シク換気足ラズ中庭ニハ鬱気満チ雨水瀦リ夏日ハ暑ニ堪ヘズ之ヲ要スルニ此式ハ衛生上最モ厭フベキナリ(6)

狭い旧市街、密接に立ち並ぶ建物、その背後に連設される居住棟、地下室や屋根裏にまで詰め込まれた裏屋の住民、よどんだ空気が立ちこめる暗く湿った中庭、このような「閉式」の構造は、まさに「衛生上最モ厭フベキ」といえた。「舞姫」の貧民街の描写には、そうした鷗外の認識が反映されていると見るべきだろう。「街の準には清らなり」とされた旧地区の中庭の表現や、そこにある「芥溜の箱」への言及は、都市の衛生状態に向けられた作者の関心を漏らしている。

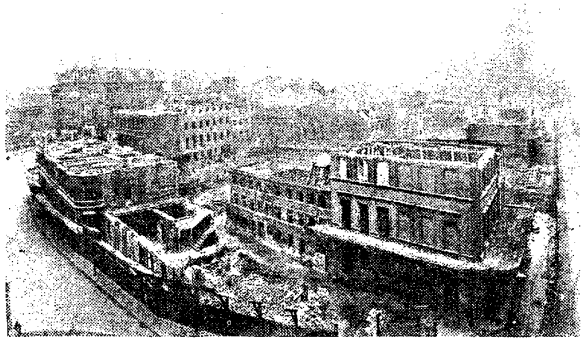
この点にベンヤミンとの大きな相違を見出すことができる。文人である以前に医学官であった鷗外にとって、ミーツカゼルネやそれに取り囲まれた中庭は、まず衛生的に問題として映ったのである。官吏として行政側に身をおいていた彼は、中世の面影を偲ばせる古伯林（アルト・ベルリン）に対して愛着の情を抱く一方で、過密で不衛生な旧市街を、再開発されるべき対象として見ていた。実際に、当時のベルリンでは、市内のいたるところで再開発が進み、古い家並みが取り壊されていったのである。この頃のドイツ文学には、「ベルリン小説」と呼ばれる作品群があり、それらは頻繁に、こうした都市の近代化と、その渦中に生きる市民を描き出している。その中から、マックス・クレッツァーの小説、『ティンペ親方』の一部を引用してみよう。

（古い家屋が取り壊された）その場所では、ある中庭を覗き見ることができた。その中庭にはつい先日まで、空気が通わず日光も射し込まなかったのだが、いまや裏屋の秘密を晒してしまっていた。そしてその横に、小さい園が見えた。その庭園はこれまで、まるで希少な宝石のように、くすんだ壁に囲まれた中でその所有者の愉悦にのみ仕えていた。それがいまや、遠くからでも眺められるオアシスさながらに、人目を引きつけているのだった。(7)

外界から隔絶した中庭という空間、「空気が通わず日光も射し込まな」いその場所は、確かに衛生上問題であったかもしれない。しかしそこは、

裏屋の住民だけが享受できる心地よい小世界でもあった。しかし、その「裏屋の秘密」が、いまや堂々と白日の下に晒されてしまう。社会派の作家クレッツァーが主題とするのは、内側に閉ざされたこの私的な場が、だしぬけに顕わにさせられるグロテクスさと、そこに安らいでいた小市民が、有無を言わせず引きずり出されて、時流の只中に放り出されるという呵責の無さなのである。

鷗外は随所に、このように無残な姿を晒した中庭や、解体される旧市街を目にしたに違いなかった。そもそも、彼が一時居を構えた「僧房街」の住まいこそが、再開発の結果誕生した、旧市街の中の「新築」で「広壮」な建物だったのである。[8] 付近に依然として残る貧民窟との鮮明な対比の中で、留学生鷗外は、先進国の首都で展開する都市改造を肌で感じ、その行方を見据えようと努めていた。後に彼は、都市再開発の重要項目として、建物の間隔を広くして通風と採光を確保すること、いくつかの新市街を郊外に造成して多極的な都市計画を進め、その間を市街鉄道などの交通機関で接続すること、さらに、上下水道を町中に敷設して清潔な飲料水を供給し、汚水や汚物を市外へと排除することを挙げている。これらはすべて、鷗外の眼前で展開していたベルリンの衛生政策に他ならなかった。次章からは、こうしたベルリンの衛生化のプロセスを、鷗外との関連において、さらに詳しくたどってみよう。



図版４　ベルリン旧市街の大々的な再開発の光景。（一八九四年）

ベルリンの水

十九世紀末のベルリンを描いた作家として名高い、テーオドア・フォンターネの代表作の一つに、『迷誤あれば』がある。近衛将校ボートーと町娘レーネの身分違いの愛と別れが主題となるこの物語は、やはり軍官にして庶民の娘と叶わぬ恋に落ちた鷗外自身の「舞姫」体験と相似の関係にあって非常に興味深い。しかし、ここで注目したいのは、こうした愛の成り行きではなく、ジャーナリストでもあったフォンターネによって精確に写し出された都市の姿なのだ。それはまた、鷗外が見聞したベルリンともどこかで重なり合うはずだ。さて、主人公のボートーは、上京してきた伯父と、街中の有名レストラン「ヒラー」で会食することとなる。伯父は、飲み物を注文する際、ボートーと彼の友人に次のように言うのである。

「よし、シャブリだ。それからお冷やもな。しかし、水道のはいかん。水差しがくもるようなのがいい。（・・・）この熱気、この季節はずれ

の暑さがなければいいんだがね。空気がほしいよ。諸君、空気が。きみらの美しいベルリンときたら、ますます美しくなってゆくが（まあ、少なくともそれよりましな褒め方のできない連中はみんなそう請けあうがね）、ここには何でもそろっているのに、空気だけはない」(9)

地方の領主である伯父は、皮肉たっぷりに、日々巨大化していくベルリンを、「ますます美しくなってゆく」と評している。しかし、同時に彼は、よどむ「熱気」に閉口し、「空気がほしいよ」とぼやくのである。彼らが座しているのは、「狭くて暗い中庭に面していた」小部屋、すなわちこれは、鷗外が採光と通風上問題とした先の「閉式」の構造に他ならない。「ここには何でもそろっているのに、空気だけはない」という伯父の言葉は、再開発前のベルリン、つまり、帝都としての体裁が整わないまま大量の物資や大勢の人間が押し寄せ、過密・飽和状態を呈していた街の様子を、間接的に伝えているのである。

だが、ここで注目したいのは、水を頼む際に、伯父が「しかし、水道のはいかん」と釘を刺す点である。彼が所望するのは、「水差しがくもるような」水、つまり、汲みたての井戸水なのだ。そもそもベルリンは、豊富な地下水脈の上に位置しており、また土地が砂岩質のせいもあって、砂利でろ過された良質な水に事欠くことが無かったのである。市民たちは、各戸の中庭にある共同の井戸からふんだんに生活用の水を使い、街中を走る辻馬車の御者たちは、通り沿いに設けられているポンプから地下水を汲み上げ、馬に水を与えてその体を洗った。そして、街中いたるところで泉水が水盤を満たし、さらには、大小さまざまな噴水が常に市民の目を楽しませていたのである。これは一般に水事情が悪かったヨーロッパの他の大都市に比べ、かなり例外的なことと言えた。(10)

しかし、十九世紀の中頃、その恵まれた状況は変わり始める。時代は産業革命を迎え、市内に大工場が建ち並び、さらに、都市の人口が爆発的に増加しはじめた。同時に、これまでとは比較にならない規模の水が汲み上げられ、また大量の汚水が排出されるようになった。当然の結果として、地下水は次第に汚染され、コレラやチフスなどの疫病がはびこるようになったのである。こうした事態を打開すべく、政府は上水道の導入を決定する。まず水道先進国であるイギリスに範を仰ぎ、一八五二年に英国のフォックス&クランプトン社と契約を交わして水道会社を起こし、上水道の敷設に着手する。そして四年後の一八五六年、ベルリンを貫くシュプレー川沿いのシュトラーラウ門に設けられた浄水所から、道路の下に埋設された配管を通じて、清潔な飲料水が市内へと供給され始めたのである。

ちなみに鷗外は、ベルリンに腰を据えて間もなく、この浄水所を視察に訪れている。一八八七年（明治二十年）五月二十四日付の彼の「独逸日記」

図版5　ベルリン市内の路上で給水される馬。

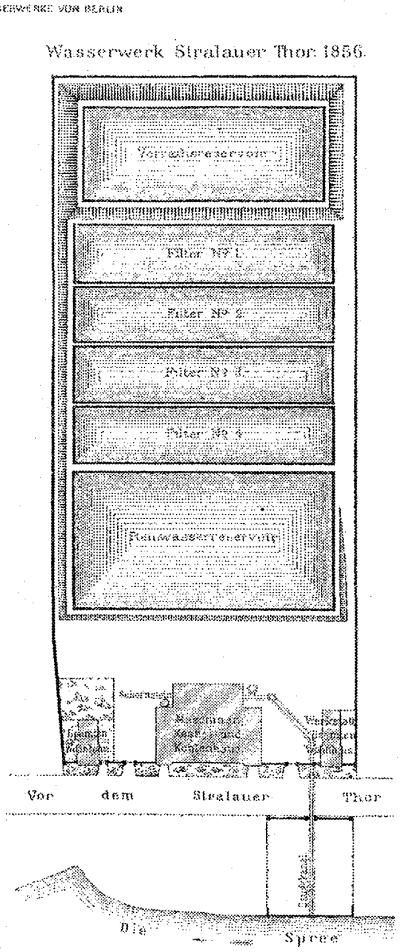
にはこう記されている。

コツホ師諸生を導きてストララウ Stralau に至る。水道の源を観る。余北里、隈川等と与る。帰途ルムメルスブルヒ Rummelsburg に至る。地小湖に枕(のぞ)む。景致愛すべし。一群の遊人あり。男女相半す。迷蔵の戯（引用者注・目隠し鬼ごっこ）を為す。傍若無人。余儕(よら)呆然たり。

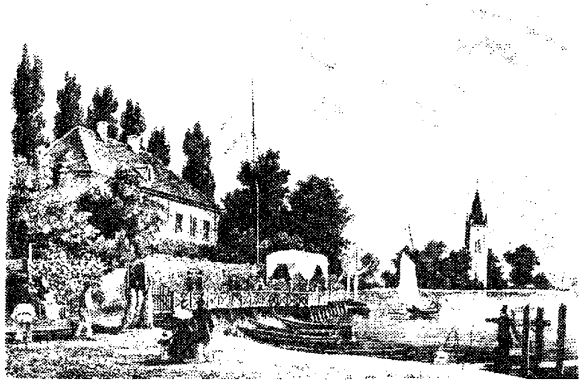
ベルリンの南東に位置する「ストララウ」一帯は、「景致愛すべし」という鷗外の言葉通り、かねてより、シュプレー河畔の景勝の地として知られていた。付近の「ルムメルスブルヒ」は、川が蛇行してできた湖岸の土地で、週末には水浴や舟遊びを楽しむベルリン市民たちで賑わった。もちろん、その中には多数のカップルもいただろうし、彼らは、都会を離れた開放的な空気の中で自由に戯れ、鷗外たちを「呆然」とさせたのだろう。ちなみに、『迷誤あれば』のボートーとレーネもまた、ルムメルスブルヒよりもさらに上流にさかのぼった「ハンケル置場(アブラーゲ)」で、誰にも邪魔されない二人きりの逢瀬を楽しんでいる。

鷗外の「ストララウ」の記述においては、いきおいこうした観光・風俗に目が行ってしまう。しかしここでは、彼が「コッホ師」に導かれてこの場所を訪れていることに改めて注意せねばならない。彼が師事していたローベルト・コッホは、コレラ菌や結核菌の発見でノーベル賞を授与された学者として知られている。鷗外留学当時、コッホはすでに細菌学の権威であり、ベルリン大学衛生学研究所の所長の任にあった。衛生学やそこから派生した細菌学という学問すら一般に認知されていなかった時代、コッホと彼の研究所が公衆衛生の発展に寄与した功績は大きい。そうした大家が弟子を引率してシュトラーラウの浄水所へと赴くわけだが、その意義もまた大きいというべきだろう。

そこで汲み上げられた川の水は、四層のフィルターでろ過された後、蒸気ポンプの力で水道管へと送られ、市内の各戸へと供給された。しかしこれは



図版 7　開業当初の浄水施設の構造。川から汲まれた水が、上部の貯水槽から四つのフィルターを通って、下部の浄水タンクへと導かれる。



図版 6 「ストララウ」の光景。

単なる飲料水の問題にとどまらない。水道網が展開し、管理された均質な水が行き渡ることは、その配管を通じて、「清潔」や「衛生」という思想が、個々の家庭にまで達することを意味している。水道の普及をきっかけに、ベルリンでは衛生に対する一般の意識が急速に高まったと言ってよい。すなわち、鷗外たちが見学した「水道の源」は、かつて帝都の公衆衛生を確立させた、記念碑的な場でもあったのだ。

市民が平等に清潔な水を享受できるようになったその事実は、大衆という規模で衛生をコントロールすべき新時代の到来を、何よりも分かりやすいかたちで一般に知らしめた。しかし、生活環境の急速な発展に戸惑う旧世代の人間にとっては、井戸が水道に駆逐されてしまうことは、一つの世界の消失にも等しかった。そもそも、井戸や泉は長い間、日常の生活に欠かせないだけでなく、深くドイツ人たちの内面に関わっていたのである。その一例を挙げてみよう。

市門の前の井戸端に　　Am Brunnen vor dem Tore
菩提樹が一本立っている　　da steht ein Lindenbaum;
その木陰の中で　　ich träumt' in seinem Schatten
幾度も甘い夢を見たものだ　　so manchen süßen Traum.

いまなお広く愛唱されるこの歌は、シューベルトの歌曲『冬の旅』に収められている、「菩提樹」の一節である。これは、ドイツ文化圏における井戸や泉のイメージの典型といっていい。昔からその周りには、樹木が茂って木陰をつくり、その下に据えられたベンチにはさまざまな人が憩い、よもやま話の花が咲き、愛がささやかれ、詩が詠われたのであった。だが、水道の出現により、井戸にまつわるこうした「甘い夢」は終焉を迎える。各戸の蛇口から浄化された水がほとばしり出たとき、市民たちは衛生と引き換えに、かつて水辺に寄せた個々の夢想や、そこに集う「井戸端」の人間関係を失うことになった。(11)

さて、『迷誤あれば』の旧世代の伯父は、前述のように水道の水をきっぱりと断る。この自称するところの「真の保守主義者」は、清潔だが不味い水道水よりも、不衛生かもしれないが清冽な井戸水を選ぶのである。実際、時代に背を向ける彼のような例は多かったろう。しかし、相次ぐ伝染病の流行により、こうした昔気質は次第に影を潜め、公衆衛生の重要性はますます強く認識されていく。そんな中、一八九二年の八月、ハンブルクでコレラが発生し、数週間で八千五百人ほどが犠牲になるほど猛威を振るった。この時期、鷗外はすでに帰国していたが、彼の後にドイツに赴いた法学者、岡野敬次郎が、私信において次のように書き記している。

なお、ドイツでは、ハンブルク市でコレラが発生し、十分予防措置を講じてはいるものの、何分海上交通の盛んな港町ということもあり、毎日出入りする船の数が多く、おまけに港で働く人達、船員達の多数が、港に流れてくるエルベ河の汚い水を飲むのですから、最近でも一日千人近い新たなコレラ患者が発生し、その三分の一は死亡しているということです。ベルリンはハンブルクに近いので、厳重な警戒を行なっており、巡査は各家庭を巡回して、生水を飲んではいけない、飲むなら一度沸かしてからにせよ、その他すべて清潔にするよう注意を促しています。（吉野俊彦による現代語訳）(12)

ハンブルクでコレラが猖獗を極めた一方で、ベルリンはその病禍を免れることができた。その背景には、ベルリンの水道水がろ過処置を施した近代的なものであったことの他に、官憲を通じて徹底的に遂行された、予防キャンペーンの効果があったと思われる。それは岡野が書簡で記すとおり、「巡査」が「各家庭を巡回して」虱潰しに衛生指導を行う念の入ったものだった。街中いたるところで唱えられる「生水を飲んではいけない」、「すべて清潔にするよう」にという声は、感染に怯える市民の内面に深く浸透したことだろう。こうした世界には、もはや水道の水を嫌う『迷誤あれば』の伯父は存在し得ない。また同時に、警官を動員して全市に展開したこの予防措置は、本来、衛生と権力が不可分に結びついていることを改めて告げている。

ちなみに日本ではまさにこの時期、衛生という制度、そしてそれを執行する権力をめぐって、大きな転機を迎えていた。というのも、鷗外が留学中の一八八六年（明治十九年）、衛生行政が、内務省衛生局の手を実質上離れて、警察の管轄下に入ったのである。これ以後、一九四二年（昭和十七年）に至るまで、警察が国民の健康を取り締まることになった。小野芳朗は、日本における国家衛生システムの展開を扱った著書の中で、人民の自治的な衛生制度の確立を目指した衛生局側の計画が頓挫し、伝染病の流行時に機動力を生かせる警察組織が実権を握るようになったこの経緯について述べている。さらに彼によれば、森林太郎は、自治による衛生国家の確立には批判的であり、公衆衛生の制度として「衛生警察（ゲズントハイツポリツァイ）（Gesundheitspolizei）」を主張していたのだという。(13) 鷗外がどの程度、衛生事業に警察が介入することを許容していたのかは分からない。しかし、「衛生警察」を支持した彼の脳裏には、統制がとれ、業務執行に何よりも強制力を発揮したプロイセンの「巡査」の姿があったのかもしれない。いずれにせよ、衛生と権力という問題は、ドイツで学ぶ鷗外にとって、大きなテーマであり続けた。

図版 8　威厳漂うベルリンの巡査。尖った金具の付いた制帽と青の制服がトレード・マークだった。

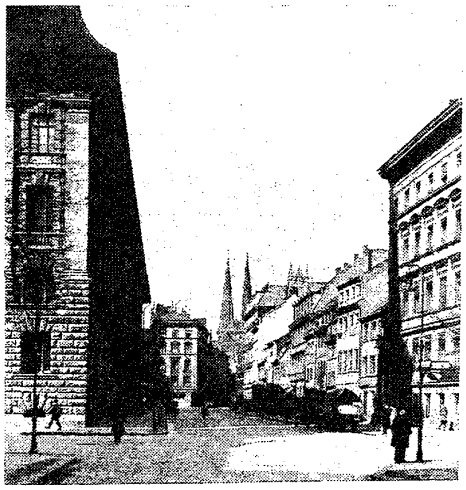
「下水を汲む」鷗外

先にベルリンの地下水が汚染された背景として、十八世紀中頃の産業革命とそれに伴う人口集中が挙げられた。より詳しくいうならば、その主な原因は、爆発的に増加した住民が垂れ流す生活排水にある。例えばベルリンのトイレ事情に関して、北ドイツの代議士であるアウグスト・ベーベルは、一八六七年にベルリンを訪れたときの様子を、次のように振り返っている。

> 通りや広場には用を足せる施設が無かった。他国者や特にご婦人は、もよおしたときには絶望に陥るしかなかったのである。屋内のトイレは、そのほとんどが信じられないほど粗末なものだった。ある晩、妻を連れて王宮劇場に訪れた。幕間で男子の小用トイレに入ったとき、私は驚いてしまった。トイレの真ん中に大きな桶が置いてあり、壁際に幾つかのしびんがあって、用を足した後には、自分の手でしびんの中身を大きな共同の桶に空けなければならないのだ。まったく民主的で結構なことだ。大都市としてのベルリンは、一八七〇年になってから、ようやく野蛮な状態から抜けて、文明へと足を踏み入れたのである。(14)

これがかつての「王宮劇場」のトイレの実情だった。ましてや「信じられないほど粗末な」庶民の便所の様子は、推して知るべしである。この頃、人間の排泄物は、このように共同便所の「桶」やおまる状の容器に溜められた後、汲み取られて馬車で運搬されるか、あるいは往々にして、そのまま街路に流されていた。この点に関して図版9を見てみよう。これは「古伯林」地区にあるパロヒアール通りを写したものだ。左が一八三一年、右が一九二七年当時の模様である。二枚の図の違いで最も目を引くのは、整備・拡張された路面であろう。近代化以前の左の図においては、道路には舗石が敷かれ、脇に走る排水溝が見える。当時、路上の汚物は、先の糞尿をも含めて、すべてがこの溝に流されたのである。その汚水は、市内を貫くシュプレー川に流れ込むか、または、溝が詰まると路上にあふれ出し、街中に耐え難い臭気を充満させた。一方、右の図では、こうした「野蛮な状態から抜けて、文明へと足を踏み入れた」さまが描かれている。路面はアスファルトで舗装され、汚水は地下に埋設された下水管を通るようになった。そのため、不衛生な側溝が姿を消し、路面は洗い流されたように清潔になったのである。

鷗外が滞在した頃のベルリンは、この二枚の図の中間、すなわち都市インフラの新旧交代の時期にあたっていたと言えるだろう。鷗外が「舞姫」にて描写したスラム街の光景、つまり、粗悪な建物がせり出した「狭く薄暗き」小路が続き、路面の舗石は整備されずに「凸凹坎坷（とつおうかんか）」の様相を呈し、「猶太（ユダヤ）教徒の翁」が所在無く居酒屋の前に佇むその様子は、明らかに再開発前の左の図版に近い。文学による描写では、残念ながらその場所の臭



図版9　ベルリン旧市街、パロヒアール通りの光景。一八三一年と一九二七年。

いまでは伝わらない。しかし、こうしたベルリンの貧民窟では、まだ完全には下水設備が行き届いていなかっただろうし、図のような側溝が、時として強烈な臭気を放っていたに違いない。だが、その一方で鷗外は、最先端のベルリンの下水道施設を、目の当たりにしてもいた。前述のように、ベルリン大学付属衛生学研究所で学んでいた彼は、師コッホの薦めにより、下水道中における病原菌の研究に従事していた。そのため、彼は数度に渡って下水の操作局や排水所を訪れ、また自ら下水を採取して研究材料としていたのである。当時の鷗外は、ベルリンの地下を走る水道網に関して、誰よりも精通していた人間の一人だった。

ここでベルリンの下水道の歴史を振り返ってみよう。[15] 一八五六年に上水道が開通した際、もっぱら前述の側溝に頼っていたベルリンの排水設備は、根本的な見直しを迫られることとなる。しかし当初は、その溝を大きくしたり、より深く掘り下げたり、あるいはせいぜい石板で蓋をする程度の応急処置に留まっていた。しかし、上水の供給量が年々うなぎ上りに増加し、さらに、過密化した都市の衛生状況がますます悪化する中、当局は、本格的な下水処理システムの設営に踏み切らざるを得なくなった。そこで一八六〇年、政府の命を受けた建築士、フリートリッヒ・E・S・ヴィーベは、パリやロンドンなど各所を訪れて最新の下水道施設を視察し、翌年にベルリンで最初の下水道計画書を作成する。それは、ベルリンを貫くシュプレー川の左岸と右岸に、川と並走するかたちで二本の下水道を通す案であった。街中を走る支線からこの二本の本管に流れ込んだ汚水は、やがて一つにまとめられ、蒸気ポンプの力で、街から離れたシュプレーの下流に流される予定だった。

しかし、提出されるやいなや、この計画は専門家から一般の市民に至るまで、激しい論争を引き起こすこととなる。そもそも下水道の導入に反対する者は、地下に大がかりなネットワークを敷設するよりも、既存の側溝のさらなる改良や、スムーズに取替えができる汚物集積タンクの使用を主張した。一方、賛成派においても、ヴィーベ案に対しては否定的な声が多かった。とりわけ問題視されたのは、結局は汚水を川に垂れ流してしまう点と、たった二本の下水道とその枝管、および一つのポンプ施設だけで、激増する都市人口の膨大な排水を処理できるか、という点だった。こうした論議の中、浮上してきたのは、ヴィーベと同じ視察旅行に加わった技師、ジェームズ・F・L・ホープレヒトによる下水道案である。彼は、汚水を衛生的かつ経済的に処理するために、川ではなく郊外の田畑へ導き、そこで灌漑農業に役立て

ることを提唱した。彼の計画では、ベルリンが十二の区域に分けられ、そのブロックごとに下水道網を展開し、集められた汚水をそれぞれのポンプ施設から指定の耕地に送ることになっていた。しかし、ホープレヒトの案にも、そのコスト面において、批判的な意見が寄せられたのである。

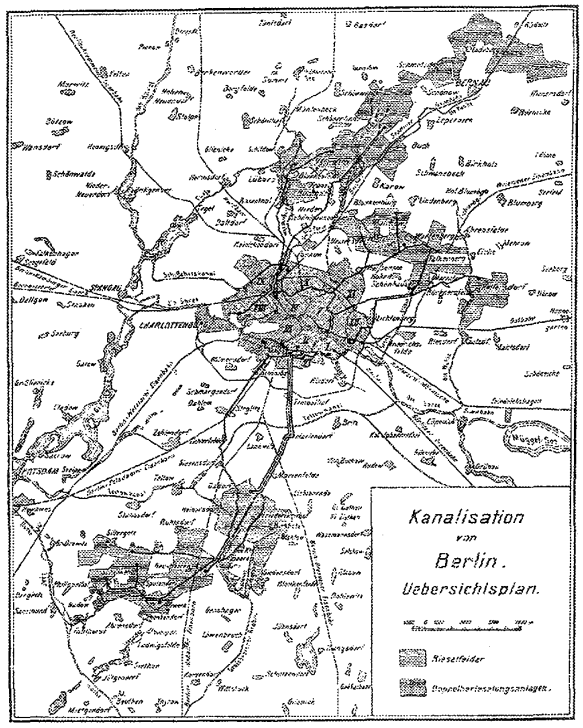
こうして下水道をめぐり市議会や世論が紛糾し、その導入のめどはなかなか立たず、時間ばかりが徒に過ぎていった。そこで一八六七年、市当局は事態の収拾に乗り出す。世界的に有名な病理学者にしてベルリンの市会議員でもあるルードルフ・ヴィルヒョウを長として、下水道に関するさまざまな疑問に答え、敷設に必要な諸資料を収集・検証するために、市直属の調査団が編成されたのである。彼を中心に、衛生学、地理学、建築学など多岐にわたる分野のエキスパートが参加して、精力的に調査が進められた。とりわけ、都市の汚水を灌漑農業に利用する点に関しては、郊外のクロイツベルク西方に試験農場が設けられ、数年にわたって実験が繰り返されて、その有効性が確認された。そして五年後の一八七二年、ヴィルヒョウは活動の集大成である「一般報告書」を作成し、市議会に提出したのである。(16) 彼はその結論において、ヴィーベにより作成された先の計画を退けた。というのも、すでに一八六七年、シュプレー川に汚水を流すことが法的に禁止されており、このプランではそれを灌漑に転用することが困難だったからである。代わって採択されたのは、汚水を効率的に再活用できるホープレヒトの下水道計画だった。「放射システム」と呼ばれるこの案では、その名の通り郊外へ向けて放射状に導管が敷設されており、独立した複数の下水システムからなる構造ゆえに、詰まりが生じた時には、他の下水道網にその影響を与えず、緊急の場合には、他のネットワークに接続して危機を回避できるという利点があった。

調査団の報告を受けて、さっそく市議会は翌一八七三年、まず第三地区の下水道網の敷設に着手する。最初にこの区域が選ばれた理由は、目抜き通りのウンター・デン・リンデンやフリートリッヒ街、ティーア・ガルテンなど市の中心部を占めている他に、富裕な市民が多く、上水道の消費が多い場所であるからであった。その地中に陶製の配管が敷設され、各戸に接続された。それを通じて汚水や汚物が、まずポンプ施設(Pumpstation)へと集められた。これは、各下水道網の最も低い地点に設けられており、汚水は一度この施設の貯水槽に溜められて、そこで不純物が取り除かれた。それから郊外の灌漑農地へと導かれるのだが、その際に蒸気で圧力が加えられるため、ポンプ施設からは鉄製の耐圧管が使用されることとなった。こうした設備が整った一八七六年、ベルリン初の下水施設がいよいよ稼動を始めたのである。その後、一八七九年に第一、第二、および第四システムが開通し、一八八一年には第五システム、一八八三年に第六、第七、第十システム、さらに一八八六年には第八と第九システムが次々と完成していった。八十年代末にベルリンで留学生活を送った鷗外の足元には、すでに縦横に下水道網が展開していたのである。

衛生学を専攻する医学官鷗外にとって、こうした近代都市のインフラ設備は、当然、大いなる関心事であった。「独逸日記」によれば、彼は一から十まである放射システムのうち、第五システムのポンプ施設で実験用の汚水を汲み、第一システムの「下水排送所」を、上官である石黒忠悳とともに視察している。また他にも、鷗外はベルリン各所で汚水を採取し、下水の操作局や消毒所を訪れ、関係者と話を交わしている。こうした

留学の成果を、鷗外は、帰国して間もなく、一般向けの衛生学に関する講話において次のように紹介している。

下水と一口に云へば、今まで日本にも有りふれた町の両側の溝などのやうに、誤解する憂がありますが、衛生学者の下水と云ふのは全く違つたものです、下水の源は、家の中で厠と台所にあります、厠に水の仕掛があつて、大小便をよく洗ひ流すのを、英語でウォータークロセットと云ひます、其の大小便を洗ひ流した水が流れて、台所と湯殿とから来る水と一所に落ち合つて、町の底に填めてある管の中へ這入ります、其管は次第に集まつて、仕舞には大きなものになッて、随分其中を舟に乗ッて通られる位いなものになります、其の下水の大管は、下水役所の中に設けてある大きな溜池の中へ這入つて、其処で少時の間水が溜まつて居て、水と一緒に流れて来た、固い物は澱んで仕舞ひます、其時に下水の上澄ばかりを取て、始めて棄てるのです、其の棄場は、町によって違ひます、(…) 伯林などでは、下水の溜池から、ポンプ仕掛で、汚水を田舎へ送り、野菜だの煙草だのを作る田の上に流します。(17)



図版 10　ホープレヒトによるベルリンの下水道網（一九〇六年）。中央のローマ数字で記された各システムから、黒いラインの下水道が、放射状に郊外の灌漑農地へ延びている。

この描写は、鷗外が、「厠と台所」といった「下水の源」から、「其の棄場」である「田舎」の農場に至るまで、都市の排水システム全体を知悉していた事実を示している。しかし、ここで注目したいのは、彼が、旧来の側溝に比べ「衛生学者の下水と云ふのは全く違つたもの」と強調していること、つまり、下水との関連において、「衛生」という新たな概念のありように触れている点なのだ。何よりもそれは、彼が語る下水道の構造に現れている。各戸の排水口に直結した下水管が、「町の底に填めてある管」に接続して次第に収束し、やがて「下水の大管」となって「下水役所」へと行き着く。ここでは、垂れ流しだった「町の両側の溝」と大きく異なり、汚水や汚物をその出所から押さえ、一まとめに束ね合わせた後、完全に管制下に置こうとする、「役所」すなわち国家の意思を読み取ることができる。要するに、鷗外は、衛生というものが単に健康や清潔を奨励するだけではなく、大衆を律する機能的なシステム、すなわち、国家的規模の制度に深く関わるという事実を、十分に理解していたのである。

一八九〇年八月、第十回国際医学会がベルリンで開催された。会長のヴィルヒョウは、開会の辞を述べる際、世界中から集まった医学者を前に、

自己の業績、つまり、ベルリンの下水道を誇らしげに紹介する。鷗外は、滞独中の同僚の緒方収二郎と入沢達吉から学会の資料を入手し、この演説が、今の医学と衛生学の「目的を明にして」いるとして、雑誌『衛生療病志』にその抄訳を載せている。[18] 会衆を前にヴィルヒョウが強調するのは、下水道の機能だけではない。肝要な点は、上水道が清潔な水を供給し、その排水を下水道が処理して、それを灌漑農地が効率的に活用するという、この三つの「装置」が「完備」されていること、そして、これらの働きが「一致」していることなのである。ここに至って、市民は、完全に人工による水の循環システムの中で生き始めたわけだ。鷗外が重要視したのも、当時の日本ではまだ想像すらつかない、こうした大規模な衛生「装置」に他ならない。本論では最後に、このような見識を持った鷗外が、後進の日本の衛生政策とどのように向き合っていくのか論じてみたい。

日本の衛生

明治二十一年（一八八八年）九月八日、留学を終えた鷗外は四年ぶりに故国の土を踏む。それに先立つ八月十六日、日本政府は東京市区改正条例、すなわち、東京を近代都市に改造する計画を公布していた。この都市計画案は、先に元老院において廃案に追い込まれたにもかかわらず、山県有朋等上層部の強い働きかけにより、改めて勅令として強引に公布されたのである。その施行は翌一八八九年一月一日となり、計画の推進母体として東京市区改正委員会が組織された。つまり、鷗外は、都市再開発の機運が高まり、いよいよその計画が実行に移される矢先に帰朝し、その波に引き込まれることになる。やがて一八八九年十月、彼は、建築条例を立案する取調委員として東京市区改正委員会に参与する。もちろんそれは、鷗外が留学で培った都市建築および都市衛生の学識を買われてのことだった。[19]

だが、鷗外はある困難に直面することとなる。それは、市区改正委員会の中でも、あるいは世間一般ではなおさら、衛生という概念やその重要性が依然として浸透していないことだった。そもそも、市区改正委員の長である芳川顕正は、かつてこの計画の発端ともなった「東京市区改正意見書」を上申した際、「道路橋梁及河川ハ本ナリ水道家屋下水ハ末ナリ」と述べていた。つまり芳川は、衛生上重要な上下水道や建築よりも、道路や橋梁、河川の整備を優先すべきと説いていたのである。芳川は、都市衛生を決して軽んじていたわけではないが、手順として、交通・運輸網の展開の後に来る事項であると認識していた。そのことからも推察できるように、当初より市区改正計画をめぐる世論は、ややもすれば経済・産業重視へと傾く風潮があったのである。

鷗外は、委員に名を連ねる以前より、こうした傾向を察知し、都市衛生に関する論文を多数執筆して、そのような一般の趨勢に批判を加えていた。帰国直後に発表されたこれらの論考のうち、ここではその代表格である「市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ」を見てみよう。[20] この論文は、

タイトルが如実に表しているように、東京の改造計画における公衆衛生の重要性を説いたテクストである。鷗外が見るところ、この計画に従事しているのは「衛生家」「工芸家」「美術家」「実業家」「経済家」の五類の専門家である。それぞれの主義主張を均す事が肝要なのだが、「新聞雑誌」などのジャーナリズムにおいては、衛生家以外の発言ばかりが目立ち、著しく公平を欠いている。鷗外にとってそうした偏りは、市区改正事業における衛生家の立場をますます弱くしているように見えた。

鳴りをひそめる他の衛生家に、強く檄を飛ばす鷗外の論調は、「戦闘的啓蒙」と呼ばれる彼の一時期の傾向を端的に示すものだ。だが、こうした鷗外の口吻の背景には、依然として衛生たるものを理解しない祖国の現状に対する、苛立ちに近い感情があった。論中で鷗外は、再開発計画を急がせるあまり、早く改正の図案を示せと求めたり、土地や建物を法的に処分する必要の無い所から着手せよなどと主張したりする、「政治新聞」の論説に触れる。鷗外が反駁するには、「政治新聞ノ記者諸氏ハ市区改正ニ前業（「フォールアルバイテン」）ノ必要アルヲ」知らないのだという。彼は、都市計画には先行すべき「前業」、すなわちドイツ語の Vorarbeiten（事前作業）があるとして、次のように述べている。

> 見ヨヤ伯林都人ノ将ニ下水工事ヲ起コサントスルヤ其前業ハ一千八百六十三年ヨリ六十九年ニ至レル七星霜ヲ閲シ民顯市民ノ将ニ同一ノ事業ヲ起サントスルヤ其前業ハ一千八百七十六年ヨリ八十年ニ至レル五裘葛ヲ経タルニ非ズヤ是レ皆、人物機器ヨリ費金ニ至ルマデ乏ヲ告ゲザルノ国ニ於テノ実蹟ナリ是レ皆、単ニ下水ノミニ関繋セル工事ニ於テノ実蹟ナリ

ここで鷗外がベルリンと「民顯」（ミュンヘン）の「下水工事」を引き合いに出して主張しているのは、地上の都市計画に先立つべき、地下のネットワーク敷設の重要性である。その「前業」は、ベルリンでは七年、ミュンヘンでは五年も費やされた。すでに述べたように、鷗外がドイツで学んだ都市衛生とは、市区全体を網羅し、全市民を取り込む包括的なシステムであり、その構築は一朝一夕に成り立つものではない。ましてや、市区改正を法的に手の付けやすい場所から始めるべきなどという先の新聞の論説は、このような衛生事業の本質をまったく分かっていないことの証左に他ならない。衛生官鷗外の前に立ちはだかっていたのは、マス・メディアを介してますます増大するこうした無理解の壁であった。

いや、鷗外が相手をすべきは、一般の門外漢に限らず、同じ衛生学を専門とする者たちの中にもいた。「市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ」の中で鷗外が繰り返し批判するのは、当時の衛生学者によって一時盛んに主張された貧民追放論であった。鷗外がまとめるところによれば、それは次のようなものである。

他ノ論者ハ謂ヘラク、東京ノ市ヲシテ、不健康ノ地タラシムルモノハ、其貧ニシテ且ツ愚ナルノ下等社会ナリ、下等社会ノ富ミ且ツ賢ナルヲ待ツハ、猶ホ河清ノゴトキナリ、東京ヲシテ健康ノ地タラシメント欲スレハ、宜ク先ツ其中央ヲ画シテ、盛都ト為シ、貧愚ノ民ヲ逐フテ其外囲ニ在ラシムベシト、其言ニ曰ク、「要スル所ハ、市区改正ノ方便ヲ借リ、夫ノ裏店ヲ烏有ニ帰シテ、公衆衛生ノ事業ヲ完結シ、所謂東京ノ本地ヲシテ、無恙ナル楽土タラシメントスルニ在リ」ト、

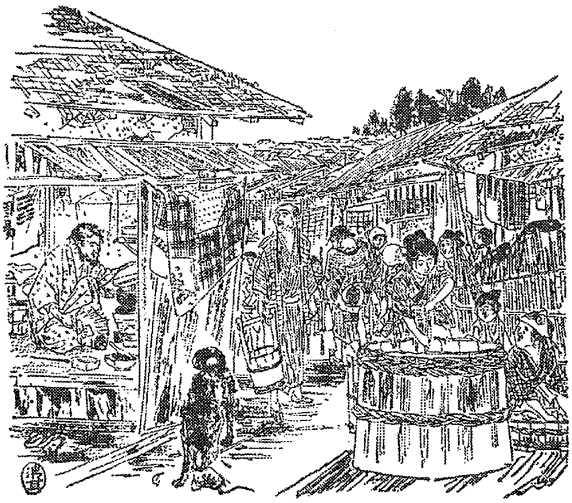
東京を不衛生にしている原因は、貧しくて蒙昧な下層の人民たちであり、彼らが富裕になって道理が分かるようになるのを待ってはいられない。市を浄化するためには、市区改正の範囲を都市の中央部に限定して、そこから貧民たちを駆逐して市外に退去させるべきである。要するに、市区改正の機に乗じて、市中のスラム街を一掃し、公衆衛生事業を完遂させ、東京を疫病の憂いが無い楽土にするのである。以上が貧民追放論の内容であり、それを提唱する「他ノ論者」とは、福沢諭吉の愛弟子であり、日本医学会や医師会の開祖の一人でもある大医家、松山棟庵であった。

鷗外が取り上げている松山の論は、一八八五年に『大日本私立衛生会雑誌』に掲載された、「衛生上東京市区改正ノ必要ヲ論ス」である。(21) その論文において松山は、まずいかに東京が不衛生な状態にあるかを述べる。それから、貧民たちが住まう裏長屋を「病魔ノ巣窟」とし、医学を解せず加持祈祷に頼る彼ら「無学ノ輩」を、「流行病ノ媒介者」だけではなく、「予防ヲ妨害スル者」として断罪するのである。そして結論として、鷗外が指摘しているように、市の中心部より「下等社会を駆出スル」ことを述べてこの論は終わる。

東京の市区を中心部に限定し、その場所を再開発すると同時に、不衛生な貧民層を駆逐する案は、この他に、海軍の軍医総監である高木兼寛によっても説かれていた。高木は松山と同じ『大日本私立衛生会雑誌』に、「裏屋ノ建設ハ衛生上及経済上ニ害アリ」と「東京衛生事務ノ拡張ハ市区ノ改正ヲ要ス」という二本の論文を発表し、この論を唱えている。(22) 高木は、松山よりもさらに一歩進んだかたちで、貧民を「逐ハスシテ自ラ去ラシムルノ方法」にまで言及している。それは、「東京市街内ニ居住スル者ハ其外ニ居住スル者ヨリ出費ノ多キ方法ヲ設ケ」ること、すなわち、市内で売買される諸物品に税を課して、貧者が生活できないようにする策であった。高木は、こうして得られた税金を「用水道路下水等ノ費用」に使用すれば、衛生的な都市計画を進めることができるとし、その実現を容易にするためにも、市区改正の範囲を限局すべきだと繰り返し述べている。

こうした貧民追放論に、鷗外は鋭い論調で真向から反対する。その際、鷗外を突き動かしたのは、必ずしも憐れむべき貧民に対する義憤の念だけではない。そもそも鷗外は、狭い区域の中に人口が集中するのは衛生上問題であり、都市は脱中心化を図るべきだと考えていた。また、論中で鷗外は、下層階級を駆逐する先の松山の市区改正策に再度触れ、それを、公衆のためではなく、富裕な人のための衛生論であると非難している。すなわち、鷗外の関心は「公衆」の捉え方にあった。この点に関して、さらに彼は次のように述べる。

衛生論ノ此ノ如キ針路ニ向ヘルハ方今我邦一般ノ勢ナリ徒ニ此一論者ヲ非責ムベキニ非ザルナリ然レトモ余等ハ其公衆ノ字ヲ解釈スルノ奇癖ナルニ驚カサル能ハズ夫レ貧人ノ生活ハ或ハ自ラ禍シ併セテ人ヲ禍スルガ若キモノアラン之ヲ救済スルノ道、如何、若シ論者ノ言ニ従ヒ此危険ナル貧人ヲ逐フテ区域ノ外ニ出デシメンカ是レ貧人ト倶ニ公衆ノ衛生ヲ窓外ニ抛ツモノナリ何トナレバ区域内ニ留マリタル富人ハ公衆ノ一小部分ナリ公衆ニ非ザルナリ既ニ公衆ナシ豈又タ公衆ノ衛生アランヤ（強調は原文）



図版 11　東京の貧民窟。

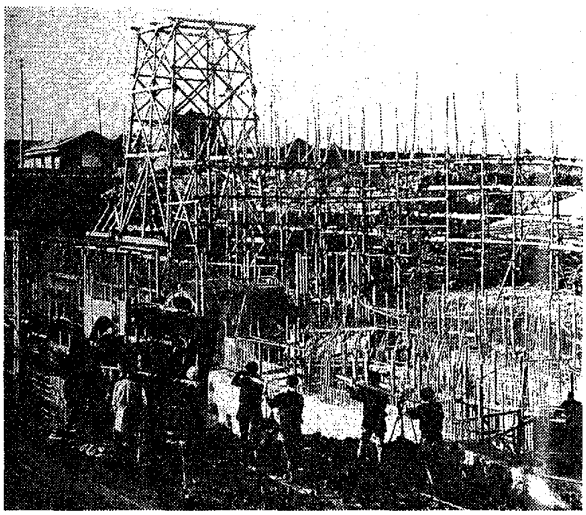
鷗外が強調するのは、「公衆ノ字ヲ解釈スルノ奇癖ナル」こと、すなわち、衛生学を専門とする者が、その対象とすべき公衆そのものを理解していないことである。貧者を市外に放逐することで、衛生の恩恵に浴するのは、富める者だけである。彼らはもはや公衆ではなく「公衆ノ一小部分」にしか過ぎない。つまりここには、身分や貧富の差を超えて、人間を公衆という均質な単位として把握する視座に欠けているのである。鷗外の論調が強まるのも当然であった。そもそも、衛生学という学問自体が、単に個々の健康を目指すだけではなく、必然的に「公衆衛生学」、すなわち、広く国民全体の身体を管制すべき性質を併せ持っている。(23) ましてや鷗外は、陸軍の軍医官として、全国から徴集された兵隊の健康を維持・管理する責務を負っていたのである。

この貧民追放を含む中央区画案は実現せずに終わった。しかし、鷗外が望んだ都市の衛生化、つまり上下水道をはじめとする各種ネットワークの展開も、遅々として進まなかったのである。上水道は、明治二十三年に水道条例が公布され、五年の計画で工事が着手された。しかし、その費用は膨大なものとなり、浄水場の用地買収にもてこずったうえ、日清戦争勃発による人手不足がブレーキとなって、作業は幾度も暗礁に乗り上げた。さらに追討ちをかけるように、不合格の鉄管を不正に納入した水道管事件と呼ばれる不祥事が発生し、それはやがて東京市議会の汚職にまで発展してしまう。結局、この水道敷設事業は、予定の倍の時間をかけて、明治三十二年十二月にようやく落成にこぎつけた。(24)

また、銀座・神田下水など一部の地域にとどまっていた東京の下水道に関しては、大規模な敷設計画案が上水道とほぼ並行して作成され、上水下水設計調査委員に提出されたにもかかわらず、早々に延期が決定し、着工のめどすら立たぬまま打ちやられた。計画や工事が再開するのはようやく大正に入ってからで、一期工事が竣工し、本邦初の本格的な下水処理施設である三河島汚水処分工場が運転を開始するのは、鷗外の死と同年

の大正十一年のことであった。ただし、この下水道網も、浅草や下谷、神田や本郷の一部をカバーするのみで、全市的な展開は、その後、さらに数十年を要したのである。(25)

鷗外自身は、日清戦争出征を機に、市区改正事業からは離れてしまう。さらに、官位が上がるにつれて、衛生学の研究からも身を引くことになった。後に衛生学に関して彼が関わった最も大きな問題といえば、脚気問題が挙げられる。アジアで猛威を振るったこの病について、鷗外は、ドイツ留学時以来、強固に細菌説を唱え、本来の病因である栄養欠陥説（当時まだ発見されていないビタミンの欠乏症）を退けた。軍医高官として彼は、兵に麦飯を摂取させる等の対処策を取らず、その結果、陸軍に夥しい数の脚気の犠牲者を出すことになってしまう。一方、海軍では、先の高木兼寛が、いち早く食事療法に取り組み、大成果を収めていた。(26) 鷗外が頑迷なまでに細菌説に固執したその背景には、もちろん、コッホやペッテンコーファーなど大家の教えを受け、当時隆盛を極めたドイツ細菌学を修めた、彼のキャリアがあったろう。しかし、この疾患をアジアの伝染病と考えた鷗外の脳裏には、衛生システムの確立どころか、その観念すら十分に理解されていない日本の現状、つまり、病原菌がはびこる不浄の地として認識された祖国のイメージがありはしなかったか。



図版 12　三河島汚水処分工場の建設工事の様子。（大正7年）

鷗外の長女、茉莉の回想に、父をめぐる次のような一説がある。

> 私の父親は、日本陸軍のだか、独逸の軍隊のだか、委しいことは知らないがもの凄い衛生思想を持っていて、夏は湯ざましか麦湯を飲ませ、果物はすべて煮たものを与えていた。（…）千駄木の家は一種の特殊地帯で、父親が（西洋料理屋のドロドロはあらゆる鍋や杓子に触れる度に、方々で黴菌がつくから不潔だ）と、嘘字をみつけた時のような顰め顔で言い、家で造れと母に命じるので、バタの匂いの嫌いな母は鼻を撮（つま）んで造らえた。(27)

「黴菌」を忌み嫌うあまり、口にするものすべてに火を通さずにはいられない鷗外の「もの凄い衛生思想」は、他の親族も繰り返し証言するところだ。また彼は、毎日まるで茶の湯のような作法で体を入念に拭き清め、身の回りを自ら整理・整頓し、家人に厳しく言いつけて家中を清潔に保ち、さらには懐紙を手にして不潔なものとの接触を極力避けた。鷗外のこうした潔癖性は、年を経るにつれてますますその度を強めて行く。彼

の目には、周囲の世界や人間が、もはや耐え難いほど不衛生に映ったに違いない。愛用する舶来の石鹸の泡を立てながら、晩年の鷗外は、衛生学を修めんとドイツに渡ったかつての自己を、忸怩たる思いで振り返ったであろうか。彼の細菌学の研究は帰国後に途絶し、東京市区改正においても彼の提言は生かされず、脚気問題では大失態を演ずる結果となった。教科書編纂など地道な業績はあったものの、彼の衛生学者としての人生は、とても成功したとは言い難い。彼がドイツで学び、日本で構想したのは、全市と全市民を網羅する衛生のネットワークであった。しかし結局、彼の衛生論は、自宅を「一種の特殊地帯」にするのみで、そこを越えて展開することはなかったのである。

＊本稿は、平成十七・十八年度科学研究費（若手研究Ｂ・課題番号一七七二〇〇七二）の補助を受けて成立した研究の一部である。

注

(1) ヴァルター・ベンヤミン（浅井健二郎・久保哲司訳）「一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代」（『ベンヤミン・コレクション3　記憶への旅』ちくま学芸文庫、一九九七年所収）

(2) 森鷗外「舞姫」（『森鷗外全集1』ちくま文庫、二〇〇〇年、十六頁）

(3) ミーツカゼルネについては、主に、Alfred Schinz: Das mehrgeschossige Mietshaus von 1896 bis 1945. In: Berlin und seine Bauten. 4. Teil, Bd. B, hrsg. v. Architekten- und Ingenieur-Verein zu Berlin, Verlag von Wilhelm Ernst u. Sohn, 1974. を参照した。また、「舞姫」の舞台としてのカゼルネ、特にベルリンの都市論による研究に関しては、いくつかの論考があるが、ここではその嚆矢であり、いまだ多くの示唆に富む、前田愛「BERLIN 1888」（『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫、一九九四年所収）をあらためて挙げておこう。

(4) 「舞姫」の草稿との異同に関しては、小堀桂一郎『若き日の森鷗外』（東京大学出版会、一九六九年）に収められている注釈が参考になった。この箇所は、同書四六〇頁。

(5) Max Rubner: Lehrbuch der Hygiene. Franz Deuticke, 1890.

(6) 森鷗外「衛生新篇」（『鷗外全集　第三十一巻』岩波書店、昭和四十九年、五七二頁）

(7) Max Kretzer: Meister Timpe. Reclam. 1991. S.155.

(8) 森鷗外「独逸日記」（『森鷗外全集13』ちくま文庫、一九九六年、一六八頁）

(9) テーオドア・フォンターネ（立川洋三訳）『迷誤あれば』三修社、一九九七年、四十四頁。

(10) ベルリンの上水道に関しては、いくつかのベルリン都市史における概要の他に、Die Beleuchtung, Wasserversorgung und Kanalisation der Stadt Berlin. Verlag von Julius Springer, 1883. を参照した。

(11) 人間が上下水道のネットワークに取り込まれ、「菩提樹」に代表される旧時代の詩情が消え失せてしまうことは、次の文献でも指摘されている。Christoph Asendorf: Ströme und Strahlen. Das langsame Verschwinden der Materie um 1900. Anabas-Verlag, 1989. S.59.

(12) 吉野俊彦『カイゼル髭の恋文　岡野敬次郎と森鷗外』清流出版、一九九七年、九十一～九十二頁。

(13) 小野芳朗『〈清潔〉の近代　「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ』講談社選書メチエ、一九九七年。

(14) Julius H. Schoeps: Berlin. Geschichte einer Stadt. Be.bra-Verlag, 2001. S.86.

(15) ベルリンの下水道に関しては、注10で挙げた文献の他に、Hermann Hahn u. Fritz Langbein (Hrsg.) : Fünfzig Jahre Berliner Stadtentwässerung 1878-1928. Verlag von Alfred Metzner, 1928. を参考にした。

(16) Rudolf Virchow: Reinigung und Entwässerung Berlins. General-Bericht über die Arbeiten der städtischen gemischten Deputation für die Untersuchung der auf die Kanalisation und Abfuhr bezüglichen Fragen. Verlag von August Hirschwald, 1873.

(17) 森鷗外「衛生学大意」(『鷗外全集　第三十巻』岩波書店、昭和四十九年、一六〇～一六一頁)

(18) 森鷗外「第十回国際医学会」(『鷗外全集　第三十巻』岩波書店、昭和四十九年、一～二十四頁)

(19) 東京の市区改正計画、ならびに、委員としての鷗外の参与については、石田頼房の諸研究、『日本近代都市計画史研究』(柏書房、一九八七年)、そして『日本近代都市計画の百年』(自治体研究社、一九八八年)、さらに、『森鷗外の都市論とその時代』(日本経済評論社、一九九九年)、から多くを学んだ。

(20) 森鷗外「市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ」(『鷗外全集　第二十八巻』岩波書店、昭和四十九年)

(21) 松山棟庵「衛生上東京市区改正ノ必要ヲ論ス」(『大日本私立衛生会雑誌』第二十九号、一八八五年)

(22) 高木兼寛「裏屋ノ建設ハ衛生上及経済上ニ害アリ」(『大日本私立衛生会雑誌』第十八号、一八八四年)「東京衛生事務ノ拡張ハ市区ノ改正ヲ要ス」(前掲誌第二十号、一八八五年)

(23) 衛生学が併せ持つこの「二つの顔」については、鷗外研究との関連で、次の論文において分析されている。大塚美保「衛生学の二つの顔――日本における近代衛生学と森鷗外」(『国文学』二〇〇五年二月号)

(24) 東京の水道の歴史に関しては、主に、佐藤志郎『東京の水道』(都政通信社、昭和三十五年)、そして、堀越正雄『水道の文化史　江戸の水

道東京の水道』（鹿島出版会、昭和五十六年）、を参照した。特に後者は、文学や生活史など多様な観点から水道に関するエッセイをも書き綴っており、その中から、本論執筆の際に参考になった、『水談義』（論創社、一九九三年）、を挙げておく。

(25) 東京の下水道については、前注の『東京の水道』の他に、『東京の下水道・一〇〇年のあゆみ』（東京都水道局、昭和五十七年）、を参照した。

(26) 鷗外と脚気問題に関しては、吉村昭による高木兼寛の伝記的小説、『白い航跡』（講談社文庫、一九九四年）、が参考になった。

(27) 森茉莉『記憶の絵』ちくま文庫、二〇〇三年、二一九～二二〇頁。

図版出典

（図版1） Bruno Schwan: Die Wohnungsnot und das Wohnungselend in Deutschland. Carl Heymanns Verlag, 1929. S.136.

（図版2） Berlin und seine Bauten. S.3.（注3参照）

（図版3） Barbara Orland: Wäsche waschen. Technik- und Sozialgeschichte der häuslichen Wäschepflege. Rowohlt, 1991. S.122.

（図版4） Benedikt Goebel: Der Umbau Alt-Berlins zum modernen Stadtzentrum. Planungs-, Bau- und Besitzgeschichte des historischen Berliner Stadtkerns im 19. und 20. Jahrhundert. Verlagshaus Braun, 2003. S.160.

（図版5） Hans D. Reichardt: Berliner Omunibusse. Vom Pferdebus zur Doppeldecker. Alba Buchverlag, 1975. S.6.

（図版6） Diethard H. Klein（Hrsg.）: Berliner Hausbuch. Bibliothek Rombach, 1982. S.579.

（図版7） Die Beleuchtung, Wasserversorgung und Kanalisation der Stadt Berlin. Verlag von Julius Springer, 1883. 5.Tafel.

（図版8） W. Reymond/ L. Wanzel（Hrsg.）: Berliner Pflaster. Illustrierte Schilderungen aus dem Berliner Leben. Verlag von Dr. W. Pauli, 1891. S.98.

（図版9） Hermann Hahn u. Fritz Langbein（Hrsg.）: Fünfzig Jahre Berliner Stadtentwässerung 1878-1928. Verlag von Alfred Metzner, 1928. S.14.

（図版10） Hermann Hahn u. Fritz Langbein（Hrsg.）: Fünfzig Jahre Berliner Stadtentwässerung 1878-1928. Verlag von Alfred Metzner, 1928. S.36.

（図版11） 平出鏗二郎『東京風俗志』八坂書房、一九九一年、二十五頁。

（図版12） 『東京の下水道・一〇〇年のあゆみ』（東京都水道局、昭和五十七年）三十二頁。